iDOLM@STER produce freedam～ Ｐとアイドルの不思議な日常

3MX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉ．Ｍ．Ｐ．Ｆ　～Ｔｈｅ　ｉＤＯＬＭ@ＳＴＥＲ　ｐｒｏｄｕｃｅ　ｆｒｅｅｄａｍ～　Ｐとアイドルの不思議な日常

【Ｎコード】
Ｎ９４６５Ｙ

【作者名】
３ＭＸ

【あらすじ】
またまた忍が現れた
今度の世界は『Ｔｈｅ　ｉＤＯＬＭ@ＳＴＥＲ』忍よ。お前の力でトップアイドルを育て上げよ

きらめく舞台へ
さらなる高みへ

いまこそ駆け上がれ

『Ｉ・Ｍ・Ｐ・Ｆ　～Ｔｈｅ　ｉＤＯＬＭ@ＳＴＥＲ　ｐｒｏｄｕｃｅ　ｆｒｅｅｄａｍ～　Ｐとアイドルの不思議な日常』

始まるよ

第一話　～Pになります～

うっす！

みんな、元気にしてるか？

俺のことは知ってるよな

そう『忍竹薫』だ

何故か分からないが

気が付いたら知らない家にいた。その家の表札には『忍竹』と書かれてた

それよりも、どうやら今日は高校の入学式らしい

なぜそんなことを言うのかって？俺が高校生になるからじゃないか

月日が経つのはあっという間である

そして五年と8ヶ月が過ぎこの度、分け合って大学を中退する事になりました

まあ、いろんな所にいって

かなりのハイスペックとなったから高校や大学が退屈なモノでしかなかったなどではなく、一身上の都合によるものです

普段、授業は寝ているのに点数をとれるのを妬まれたりしたが、流

石スルースキルはＡ＋といったところかな

喧嘩とかはしたけど、とりあえず俺の勝ちは確定していた

喧嘩をふっかけてきた奴にグラットンを見せると『すいまえんでした。許して下しあ；；』とプリケツ土下座で謝罪をしたから許してやると勝手に俺の家来になっていた

それで高校、大学と一種の伝説を作っていたみたいだ

中退後に知ったがな

家は一人暮らし（とあるマンション４ＬＤＫ）だから家具や食器、洗剤とかは最低限ある

それに麻帆良での稼ぎと魔法世界での稼ぎがあるから、このまま遊んで暮らせる

だからとはいえ、何か仕事を探さないとな

家は都心にあるから、歩いて探すのもありだな

てか高校生活であまり都心には行ってないから散歩ついでに見てくるか

―――――――――――――――

～都心散歩中～

―――――――――――――――

『離して下さい』

『やめて下さい。嫌がってるじゃないですか』

『釣れないなぁ。ちょっとくらいいいじゃん』

やれやれナンパですか
俺がチラッとナンパ師をみるとソイツは俺の知り合い（名をヤス）だった
また強引に誘おうとしてるのか…やれやれ
「そこまでにしてやれよヤス」
『誰だ！って忍の兄貴じゃないっすか！？』
「久しぶりだな。といっても卒業式以来だから5日ぶりか」
「そうっす。その兄貴は何の用でここに」
「いやな、嫌がっているのにしつこいナンパにちょっと説教をしに来たんだ」
「うっ…すいません」
「前にも言っただろ。女性は優しく接してやるのだってな。悪いな、コイツにはキチンとお仕置きしとくから、ほらどっか行った」
『は、はいぃ～』
『ありがとうございました』
カカカッ
「でヤス。いくら気が弱そうな女の子だからって無理やりはよくねぇ。男としての器が疑われる分かったか」

「へい！」

「もう強引なナンパはするなよ。じゃあな」

「兄貴、ありがとうございやした」

俺は手だけ軽く振ってヤスと別れた

さて、適当に歩くか

―――――――――――――――

移動カット

―――――――――――――――

「はぁ～」

仕事が見つからない…

しばらくは隙を持て余すしかないようだなと、思っていたら

『む、どうしたのかね？君のような未来ある若者がこんな所でため息なんて』

突然、オジサンに話しかけられた

「別になんでもないですよ」

「そうか。どうやら、訳ありみたいだな。よかったら私に話してみないか？少しは楽になるかも知れんぞ」

まあ、見ず知らずの方ですけど悪い人じゃないみたいだし話してみ

るか

「まあ、いいですけど」

- - - - - - - - - - - - - - - - - - - -

会話カット

「そうだったのか」

「ええ、ですが後悔はしないようにしてましたから後腐れはないですよ。何で自分なんかに話しかけてきたんですか？」

「おお、これはすまなかっね。私はこういう者だよ」

何々？アイドル事務所７６５プロ社長　『高木順一郎』

へぇ～社長さんか

でも俺なんかに何の用だ？

「いやいや。こちらも時間が有り余ってたので」

「そうか…早速で悪いけど君、プロデューサーをやってみないかい？」

「ヴェ？」

……続く

第一話　～Pになります～（後書き）

『ネギま！』に詰まったら書く感じですのであしからず

第2話　～突然ですかPです～（前書き）

この小説について説明を忘れた

この小説は無印でも2でもなく完全オリジナル
ニコニコ動画とかであるノベマスとかと同じようにオリジナルストーリーである

詳しいことが決まり次第
前書きに載せる

第2話　～突然ですかPです～

皆さん、この度は俺はプロデューサーになりました

はい、拍手！

で、今は高木社長の事務所
７６５プロに来ています

どうやら俺の紹介らしい
気配的に社長を含めて１３人いるな…人はいるけど売れないといった感じだろう

『オホン。いきなりですまなかったね。実はみんなに重大なお知らせがある』

扉の向こうがざわつきだす

『紹介しよう。我が７６５プロの新しいプロデューサーを、はいってくれ』

社長の紹介で事務所に入る

『彼は忍竹薫君。我が７６５プロ希望の新人だ』

「どうも忍竹薫です。まだ何も知らないですが宜しくお願いします」

「それじゃあ、まず君の面接兼ミーティングを始める。まぁ連れてきてしまったとはいえ履歴書を書いてはくれないか」

「あ、はい」

――――――――――――――――

これはカットであって手抜きではないから勘違いするなよ

――――――――――――――――

忍竹「出来ました」

俺は事務員の様な人に履歴書を渡す

？「はい。……！？」

（しゃ、社長）ヒソヒソ

社長（なんだね音無君）ヒソヒソ

音無（この方、もしかするとかなりの掘り出し物ですよ）ヒソヒソ

社長（そうか、やはり私の目に狂いは無かったか）ヒソヒソ

音無（採用でいいですよね？）ヒソヒソ

社長（元々、そのつもりだけどね）ヒソヒソ

忍竹「あの…」

音無「は、はい！」

忍竹「で、どうですか？」

社長「オホン。それは私から伝えよう。忍竹君、ようこそ765プロへ」

忍竹「ありがとうございます」

社長「こういってはなんだが我が765プロはまだまだ弱小プロダクションだからね。君のような人材は喉から手が出るほどほしいのだよ」

忍竹「そうですか…」

社長「うむ、ではミーティングを始める。まあ自己紹介と質問とかで構わない」

～応接室～

社長「では改めて自己紹介させてもらうとするよ。私は765プロの高木順一郎だ。これから、長い付き合いになるけれど頼んだよ忍竹君」忍竹「はい」

音無「私は音無小鳥と申します。主にデスクワークを担当しています。わからない事がありましたらいつでも聞いて下さいね」

忍竹「お願いします。次は俺だな。今日からプロデューサーになった忍竹薫だ。好きに呼んでくれ」

社長「それじゃ、春香君からお願いしようかな」

天海「はい！私、天海春香っていいます。子供の時からアイドルになりたくて頑張ってます」

忍竹「よろしく。春香」（このメンバーでは…普通といった感じだな。強いて言うなればツッコミもボケも両方できる万能型といったところか）

真「僕は菊地真です。僕はよく男の子と間違われやすいんですけど、みんなに女の子って思って貰いたくてアイドルになりました」

忍竹「何を言っている？こんな可愛い子が男の子の筈ないだろ？てか、さっき会ったな。アイドルだったんだ」（だが真はぱっと見だと男の子と思われるかもな。ダンスとか得意そうだ）

真「（ボフン）／／／」（男の人に初めてか、可愛いっていわるた）

やよい「私、高槻やよいれす。プロデューサーさん、お願いしますね」

忍竹「元気があってよろしい」（元気印といったところかな。太陽や向日葵といったものを感じる。だが、まだまだ子供だし、ダンスや歌が上手くはないかもな）

忍竹「ところで音無さん」

小鳥「はい。なんですか？」

忍竹「さっきからあそこでチラチラとこっちを見ている子は…」（あの子、さっきの子だ）

小鳥「ほら雪歩ちゃん。大丈夫だから、ね」

雪歩「はぅう～わ、私、萩原雪歩って言います」

忍竹「あ、あの～」

雪歩「ひうっ！？」

忍竹「さっきは悪かった。俺の知り合いが失礼したみたいで」

雪歩「そ、そんなことはないです。ただ、私、その…」

小鳥「雪歩ちゃんはちょっと男性が苦手なんです」

忍竹「そうだったか。悪かったな、無理して近付かなくていいから、少しずつ克服すればいい」

雪歩「大丈夫です。プロデューサーさんになら…／／／」（やっぱりさっきの人だ。ナンパさんと仲が良かったから恐い人かと思ってましたが、優しそうな人でよかったです。それにちょっとカッコよかったですし）

忍竹「そうか。頑張ろうな」（男が苦手か…この業界だと確実にネックになるな。まずはそこをなんとかしないと。それにこの辺で萩原といえば萩原のおじんの子か！萩原のおじんとこの奴とドンパチしたときはビビったぜ。チャカ出してくるしな。今度、挨拶にでも行くか）

伊織「やっと私の番ね！待ちくたびれたわ」

忍竹「順番だからな。それより自己紹介をしてほしい。俺は君のことを知らないから」

伊織「この私を知らないってどういうこと！？」

忍竹「初対面の相手は誰だって知らないから」

伊織「まあいいわ。私は水瀬伊織よ。アナタはプロデューサーになるんだったら覚悟しなしね」

忍竹「お手柔らかに」（お嬢様気質。優雅独尊。傍若無人といった言葉が頭をよぎった…私中心に世界が回ってるとか言い出しそうだな）

忍竹「次はそこの双子」

亜美・真美『待ってましたー！』

亜美「亜美達はね！これでも大人の女性なんだよー」

真美「お兄ちゃんなんか一撃ノックアウトなんだぞー」

忍竹「うるせーマセガキだな。ガキはどっかで遊んでろ――」

全員『えっ！？』

忍竹「――てのは冗談だ。よろしくな」（冗談とは言ったがマセてるだろだろこの双子）

亜美・真美『は～い』

次は…

千早「如月千早です。歌が好きでアイドルになりました。私はこの歌でトップに立ちたいです。お願いします」

忍竹「おう！初めてだが任せろ」（歌に全てを注いだといったところだろ。でも何だか、心に深い悲しみ…いや、恐れに似たような者を感じる。訳ありと来たか）

千早（どうしてだろう。この人になら着いていける気がする）

律子「それじゃあ、順番的に私ね。私を秋月律子。プロデューサーが来るまで、事務や仕事を受けたりと臨時プロデューサーをしていましたが、プロデューサー殿が来てくれたのでアイドル一筋でやらせていただきます」

忍竹「えっと待ってくれ。今までって事は俺以外にプロデューサーはいないのか？」

律子「ええ。だから頼りにしてますよプロデューサー殿」

忍竹「はぁ～」（うん薄々は気付いていたが、圧倒的なプロデューサー不足か…律子ならいける気がするが本人がアイドル志望ならそれを手伝ってやるか）

忍竹「そこの眠り姫は後にして、続けて」

あずさ「私、三浦あずさと申します。プロデューサーさん。これからよろしくお願いしますね。フフフ」

忍竹「こちらこそ」（あずささんはおっとりてるな、でもどこか抜けてるような、天然というか、とにかく気を付けよう。絶対に迷子になりそうなタイプだし）

忍竹「そんじゃ最後は、そこで寝ている子だな。すまないが起こしてくれ」

春香「あ、はい。美希、起きて」ユサユサ

美希「…ん？春香…おはようなの」

春香「おはよう、起きて。ほらプロデューサーさんに挨拶して」

美希「プロ…デューサーさん？」

忍竹「俺のことだ宜しく」

美希「美希はね。星井美希って言うの。好きな食べ物はおにぎりなの。美希はね、胸が大きいからアイドルになったら人気でるかなっておもってるの。よろしくねプロデューサーさん」

忍竹「ああ」（確かに顔立ちや身長から察するに千早や春香と同じぐらいだろ。だが2人よりもスタイルはいいし、性格的に体力もある。ビジュアルも中々…素材としてはいいんだが直ぐにドコでも寝そうだから怖いな…）

社長「みんな、各々紹介はおわったかな。それでは、本日はこれにて解散とする。ああ、忍竹君は少し残っててくれ」

忍竹「分かりました」

社長「ふむ。では気を付けて帰るように」

全員『お疲れ様でした＾＾』

忍竹「気を付けろよ～」

……続く

第2話　～突然ですかPです～（後書き）

次回

『Ｉ・Ｍ・Ｐ・Ｆ　～Ｔｈｅ　ｉＤＯＬＭ@ＳＴＥＲ　ｐｒｏｄｕｃｅ　ｆｒｅｅｄａｍ～　Ｐとアイドルの不思議な日常』～俺と社長とお隣さん～

お楽しみに

第3話　～俺と社長とお隣さん～（前書き）

春香『前回の投稿でお気に入り登録が7件になりました。この小説を登録して下さっている皆さんに感謝です』

忍P『それじゃ第3話始まるよ』

第3話　～俺と社長とお隣さん～

社長「忍竹君。どうだったね？我が７６５プロのアイドル達は」

軽いミーティングを終えて俺は社長と話している

忍竹「みんな個性的で、まだなんとも…」

社長「そうか…。では明日から本格的に頑張ってくれたまえ」

忍竹「Ｈａｉ！」

社長「では、今日はもう帰って明日からの準備をしたまえ」

忍竹「わかりました。では」

- - - - - - - - - - - - - - - -

帰宅カット

……着きました我が家

なんだか、今日は忙しかったな。初日で仕事が見つかるとは、しかもプロデューサーとか…スーツ買っておくか

普段着と白衣しか持ってないしね

さて、晩ご飯でも作っ〔ピーンポーン〕誰だ？

忍竹「はいはい。いま開けますからね～」ガチャ

そこには銀髪と黒髪の二人がいた

？「あの。夜分失礼します。私、本日隣に引っ越しました『四条貴音』と申します。ほら響も挨拶しなさい」

？「わかってるよ～。自分、『我那覇響』！宜しくお隣さん」

忍竹「四条さんと我那覇さんね。よろしく。俺は『忍竹薫』。忍竹は言いにくから忍でいいよ」

貴音「かしこまりました。それで忍さん。コレを」

四条さんは俺に桐箱を渡した

響「それは引っ越しそばだぞ。お隣どうし仲良くしよ」

俺は箱を開けて驚愕した

こ、コイツは

忍竹「……」

貴音「あの、どうかなさいましたか？」

忍竹「こ、コイツはそばじゃない…ラーメンだ」

響「な、なんだってーー。貴音！？この麺はラーメンだぞ！！」

貴音「何を慌てているのですか響。それは紛れもないらあーんですよ」

響「どうしてさ！？引っ越しといえば蕎麦に決まってるだろ」

貴音「確かにその通りです。ですが、蕎麦とらあーんならばどちらがより喜んでいただけるとれば、らあーんですよ響」

忍竹「どちらにせよありがと。何かあったらいつでも相談によるよ」

響「うん。薫は良い奴だな」

貴音「こら響！いきなり呼び捨てなどはなりません」

忍竹「ハハハ…元気そうでなによりだよ」

貴音「あ、あの一つお伺いしてもよろしいでしょうか？」

忍竹「なに？」

貴音「昼間に一度、訪ねたのですがお留守だったので、どこかお出かけになられたのですか？」

忍竹「あ～。昼間は仕事？に行ってたからね」

貴音「どのようなお仕事で」

別に話してもいいよね

忍竹「俺ね、アイドルのプロデューサーをやってんだよ」

貴音「なんと！コレは偶然なのでしょうか？実は私たち、アイドルなのですよ」

響「まだ売り出したばっかりだけどね」

忍竹「こっちは明日からだけどね」（この2人なら間違いなくトップに立てる素質がなるな…。こんな近くにこれほどの逸材がいたなんて）

響「ん？いきなりボーっとしてどうしたんだ？」

忍竹「いや、まああれだ。2人ならトップに立てるなぁ～て思って」

貴音「そのように言われましても私たちより良いアイドルは五万といます。ですからその様なことを言われましても謙遜するしか御座いません」

忍竹「いやいや、2人ともこんなに可愛くて綺麗なんだからトップに立てるって」

響・貴音「…／／／」

響「そ、そうか／／／自分、可愛いのか／／／なんだか恥ずかしいぞ／／／」（か、可愛いのか、うぅ…余計に恥ずかしくなってきたぞ）

貴音「その様に言われると顔が、熱くなってしまいます／／／もう、あなた様はいけずです／／／」（なぜでしょう。胸がドキドキして顔が、だんだん熱くなってきました）

忍竹「ひとまず今日はコレありがと。お礼に晩ご飯でも食べてけ」

響「え！？ホントか！！」

忍竹「いいぞ。もちろん貴音もね」

貴音「御夕飯に誘って頂くのはありがたいのですが…そのよろしいのですか？」

忍竹「何を言ってんだ。一人寂しく食べるよりは誰かと一緒の方がいいに決まってんだろ」

響「そうだぞ貴音。一人より大勢で食べた方が美味いぞ」

忍竹「響。わかってるじゃないか。そうそうだから貴音も入った入った」

俺は貴音の手を掴み部屋の中に入れた

貴音「そんな／／／強引過ぎます／／／」（手が触れてます／／／）

響（何だろう貴音が手を繋いでるとムカムカするぞ）

～忍の部屋～

三人称視点

貴音と響は四角いテーブルで向かい合い忍は左に響、右に貴音が見える位置に腰掛けた。座布団だから座ったというのか？

忍竹「まあ飲め悪いな。いつも一人で食べてるから座布団なんだよ」
響「別にかまわないぞ。自分、実家だといつも座布団だからね」
ここで忍はキッチンに向かう
貴音「私も構いません。このように席を囲むからこそ食事に意味があるのです…て、あれ？あの方はどこへ？」
響「キッチンだってさ。ところでさ貴音。薫は一人暮らしなのに湯飲みが3つ出て来るんだ？」
貴音「確かに言われてみれば先ほど『いつも一人で食べてる』と言ってました」

補足をしようじゃないか
忍は一人暮らしなのだが普段から家にあるのは3～4人用の食器と座布団である
ヤスがたまに誰か連れてくるから、お持て成し出来るように準備されている
変な物も多いがな…

クッキングカット

少ししてから忍がお盆を持ってキッチンから出てきた
お盆の上には月見うどんが3つ乗せられている

忍竹「さぁ！俺特製の月見うどんだ。ちゃんと食えよ」

響「それじゃ早速、いただきまーす！」ズルッ

貴音「こら響きちんとお礼をしてから頂きなさい」

響「……う」

貴音「響…どうなさいましたか」

響「う、う…」

忍竹「響？」

響「う…うーまーいーぞー！美味い！美味すぎる！！」

忍竹「そりゃよかった。一瞬、変なもんでも入れちゃったかと思った」

響「うん。凄いぞ！薫の料理、とても美味いぞ！ほら、貴音も早く食べて」

貴音「ではいただきます」ズズッ…

響「どうだった貴音」

貴音「この煮込み具合、柔らかいが弾力のある麺、煮込むことで濃くなるはずですが、さっぱりとした味噌ベースのスープ。素晴らしいです。誠に美味でございます」

忍竹「喜んでいただけてなによりだよ」

響「あのさ。明日の晩ご飯も一緒にいい」

忍竹「俺は一向に構わんぞ」

響（よし。明日は早く仕事を終わらせるぞ！）

忍竹「んで、貴音はいいのか？」

貴音「はい！是非、明日もご一緒させていただきます」（ナイスです響！これで明日も忍様と一緒にいられます！！）

忍竹「そうか。明日も楽しみにしてるぞ」

……続く

第3話　～俺と社長とお隣さん～（後書き）

春香『プロデューサーさん！これはどういうことですか！！』

忍P『な、なんのことだい…』

春香『私たちより、あの子達の方が出番が多いですよ！！』

忍P『そうだったか…一応作者に連絡するから』

春香『頼みますよ。あ、出来れば私がメインで』

忍P『あ～うん。頑張るよ』

次回

『I．M．P．F　～The　iDOLM@STER　produce　freedam～　Pとアイドルの不思議な日常』

第４話『忍竹Pのカリスマスキルは流石A＋といったところか…』

お楽しみに

穴掘り少女とクリスマス（前書き）

1日遅れましたが雪歩の誕生日イベントです（オリジナル）

今回の話は本編から1年が過ぎたくらいの話です

忍竹は『アイドルマスター』の称号持ちです

穴掘り少女とクリスマス

１２月２４日…

それは全ての人間を勝ち組と負け組に振り分けるなんとも恐ろしい１日である

そんな事とは知らずにここ７６５プロではイブにも関わらずクリスマスパーティーの準備をしている者がいた

まず７６５プロの社長『高木順一郎』と事務員の『音無小鳥』、そして我らが主人公『忍竹薫』である

ここにはいない７６５プロのアイドル達は一人を除いて、レッスンや撮影に行っている

時刻は朝の０９：３０

忍竹「ん、もうこんな時間だ。スミマセン社長、小鳥さん。自分、今から待ち合わせの時間なので失礼します」

社長「おお、そうなのか？まさか薫君にも春が訪れたのかな？」

忍竹「やだなぁ社長。今は冬ですよ。春は小鳥さんの頭の中だけで十分ですよ」

音無「うぅ…どうせ私の頭の中はいつも春ですよ～だ」

忍竹「そう落ち込まないで、今度一緒に飲みに行ってあげますから」
音無「そう言ってくれるのはプロデューサーさんだけです」
忍竹「では、これで」
忍は１０：００にあるし人物と待ち合わせをしているので抜ける
それからバイク（ライドベンダー）を走らせること約２０分
忍はとある武家屋敷にも似た家の前に来ていた
若干だが
屋敷の中から声が聴こえる
？『それじゃおとうさん、行って来ます』
？『楽しんでこい！』
？『は～い』
そして、屋敷の扉が開く
？『プロデューサー。お待たせしました～』
忍竹「構わねぇぞ雪歩。てか、さっき来たとこ…だ……」
タイトルから分かるように忍が待ち合わせていた人物こそ『萩原雪歩』、そう、彼女である

雪歩「プロデューサー？どうかしましたか？」

忍竹「い、いや！なんでも無くはないが…ただ…」

雪歩「ただ？」

忍竹「その服、凄く雪歩に似合ってて…なんつうか、可愛いぞ」

雪歩「そ、そんな。プロデューサーさん／／／／可愛いなんて恥ずかしいです／／／／」

雪歩の服装は白に統一されていて、とても似合っている

忍自身としては、今回の件を雪歩の父がよく許したと思っている

そもそも、忍と雪歩の父は知らない間柄でなく、かなり大規模のドンパチを起こしたりした

大規模といっても、忍が一人で殴り込んで、萩原父を頭するとある組織を壊滅まで追い込んだだけである

世間ではあまり知られてないが、実話系の雑誌とかに噂として載ってたりする

この事実を知っているのは忍と雪歩、萩原父、その時にいた萩原父の部下、この話を雑誌に載せた新人記者の善永、かつてのトップアイドル日高舞にまだ売れてなかったゴシップ記者の悪徳さんの六人＋α（多）

その事はいずれ本編で語られるだろうから今は置いておこう

忍竹「雪歩。どこか行きたい所とかあるか？」

雪歩「そうですね～。それじゃ、遊園地がいいです」

忍竹「よし分かった。ほら、コイツ被って後ろに乗りな」

雪歩「はい」

忍は雪歩にヘルメットを渡し、後ろに乗らせる

忍竹「しっかり掴まれよ」

忍はバイクを飛ばした

――――――――――――――――

萩原家前→遊園地

――――――――――――――――

雪歩（どどどどうしよう／／／／遊園地に行きたいって言ったのは私だけど、まわりカップルだらけだよ／／／／もしかして私とプロデューサーさんもカップルに見られてるのかな／／／／）

若干、暴走気味の雪歩と…

忍竹（やべーよ。来ちまったよ遊園地…周りはカップルしかいぬぇ。コレは腹を括るしかないのか！？てか、これって世間的にデートじゃん！！）

若干、雪歩とのデート？に照れ気味の忍がいた

……後半へ続く

穴掘り少女とクリスマス（後書き）

後半はしばらくお待ちを…

１２月中には必ずあげます

穴掘り娘と遊園地（前書き）

間に合わなかった年内更新
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
！！

しかも、ちょっとばかし強引になりましたがどうぞ

穴掘り娘と遊園地

雪歩「プロデューサーさ～ん。早くのりましょ～」

忍Ｐ「すぐ行くよ」

本日、１２月２４日は雪歩の誕生日ということで忍は雪歩と遊園地に来ている

日にちが日にちなので、周囲にはカップォが大量にｐｏｐしているがな

忍としては雪歩の努力は高く評価している
実は先日、雪歩はＡランクに昇格したのだが忍自身、他の仕事が入っていたためなにもしてやれなかった
その埋め合わせとして、本日１２月２４日にこうしてお出かけである

忍Ｐ「にしても雪歩はだいぶ変わったな」

雪歩「そうですか？確かにプロデューサーさんのおかげで少しだけ、勇気をもらえましたけど…」

忍Ｐ「それもあるけどさ、ほら」

雪歩「プ！プロデューサーさん／／／」

忍は雪歩の手を掴むと雪歩は林檎のように真っ赤になった

忍Ｐ「今はこうして、手を繋げるんだからな。雪歩は変わったよ」

雪歩「そ、そんなことないですぅ～／／／」

そんなバカップルもどきを見ている影がちらほら…

？「こちらサイレント。ターゲットは現在、手を繋いだところ。どうぞ」

？「こちらスプリング。ターゲットを補足しました。どうぞ」

？「こちらシスターアインス。にぃちゃんに動きはないよ」

？「こちらシスターツヴァイ。にぃちゃんがポケットとから何かを取り出したもよう。どうぞ」

？「こちらスプリング。ターゲットはジェットコースターに乗るみたいです。どうぞ」

？「分かったわ。スプリングはそのまま尾行して。パワフルガールとスプリングはターゲットとジェットコースターに乗って」

？「こちらパワフルガール。分かりました。どうぞ」

？「スプリング。了解しました。どうぞ」

暗躍している者がいる

忍P「なあ雪歩。ジェットコースターとか苦手だろ。無理しなくて

いいぞ」

雪歩「プロデューサーさんと一緒なら、大丈夫です～」

２人はジェットコースターの先頭に乗る

その２つ後ろにＰＧ（パワフルガール&プリング）とＳＰが乗る

――――――――――――

ジェットコースターは時を超える！キングクリムゾン！

――――――――――――

雪歩「ふぇぇええ～プロデューサ～さ～ん。目が回りますぅ～」

忍Ｐ「おいおい。大丈夫か」

雪歩「大丈夫です。大いに丈夫で大丈夫ですぅ。英語でいうとモーマンタイ…きゅぅ…」

雪歩は忍にもたれるように倒れた。そこは忍、ちゃんと受け止めます

ＰＧ「あ！雪歩いいなぁ～…プロデューサーに抱きしめられて」

ＳＰ「だぶん雪歩が目を回しただけだと思うよ…いけない。報告報告」

ＳＢ（サイレントバード）

「そう…引き続き監視を続けて。あと、観覧車にだけは近づけないでね」（雪歩ちゃん…羨ましす）

忍は雪歩は背負いベンチに座らせる

雪歩「スゥー…スゥー…」

忍P「まったく…」（こうしてみるとAランクアイドルじゃなくて普通の女の子なんだな。父親があれだけと…）

ベンチで一休みしていると、とある2人組が忍に声をかけた

？「あら薫じゃない」

？「ホントだ。プロデューサーさーーーん！！！」

忍P「ん？ああ、舞さんに愛か。2人してお出かけか？」

愛「そうなんです！ママが久しぶりに『遊園地に行こう』て言ってくれたんです！！」

舞「私だって娘とこうしたい時だってあるのよ。それより薫はなに？まさかデート？」

忍P「そんなんじゃないですよ。端から見ればデートかもしれませんけどね」

雪歩（はう～／／／プロデューサーさんとデート／／／）

愛「プロデューサーさんは雪歩と何してるんですか」

忍P「誕生日とAランクになったことでのお祝いで来てるかんじ」

愛「今日！雪歩さんの誕生日なんですか！？おめでとうございます！！」

雪歩「ありがとう愛ちゃん」

PG「こちらPG。ターゲットは日高舞、日高愛と接触。話の内容は聞き取れません」

SB「そう舞さんが…いったん引いて、舞さんがいるとこちらが不利になるわ」

PG・SP「「了解」」

舞「それじゃあ、私たちは失礼させてもらうわ」

愛「え～。もっとプロデューサーさんとお話したいです」

忍P「暇なときはいつでも、765プロに遊びにおいで」

愛「え！？いいんですか！ヤッターーー！！」

舞「雪歩ちゃん。ちょっといい？」

雪歩「はい。なんでしょうか？」

舞（ねぇ雪歩ちゃん。プロデューサーのこと好きでしょ）ヒソヒソ

雪歩（そ、そそそんなんじゃないですぅ～／／／）ヒソヒソ

舞（そう。それじゃ私がもらうけどいい？）

雪歩（ダメです…あっ！！）ヒソヒソ

舞ヒソヒソ（フフフ…）

雪歩ヒソヒソ（はぅぅ…）

忍P「愛。舞さんは雪歩と何を話してるんだ」

愛「さ、さぁ？なんでしょう？」（なんとなく分かるけど、言っていいのかなぁ～？）

忍P「まぁ少しだけ話でもするか」

愛「わーい！！」

忍P「なんの話がいい？」

愛「それじゃあ、765プロに入った時の話！」

忍P「そんなんでいいのか」

愛「はい！！」

忍P「しかたねぇなぁ～。アレは…今から1年とちょっと前の頃の話だ…」

雪歩（初めてプロデューサーにあった時はちょっと怖かったですけど、それ以上に格好良くてその……／／／）ヒソヒソ

舞（あ～。こりゃ完璧に惚れてるなあ）

忍P「俺のダチがさ、ちょっとだけ強引なナンパをしてたんだ。そのナンパされてたのが雪歩と真だったんだ。思い返せば何かしらの因果関係があったのかも知れないな」

愛「へぇ～そうだったんですか。格好いいと思いますよ」

忍P「ありがと。その後、高木社長に声をかけられてめでたくプロデューサーになったというわけ」

愛「意外です…プロデューサーなら、どこの会社でも入れると思いますよ」

忍P「そうかな？」

愛「そうですよ！石井社長も言ってましたよ『あのプロデューサー…欲しいわ…』って！！」

忍P「だからか…なんだか社長さんが言うと説得力がある」

雪歩（いま思うと、プロデューサーが765プロに残っていてくれてよかったと思います）ヒソヒソ

舞（確かに、あの実力ならどこの事務所も喉から手が出るほど欲しがるわね）ヒソヒソ

雪歩（実際に、961プロや876プロからも誘われたみたいなんですけど、プロデューサーは『ここにいたいから残ります。それに俺の役目は終わってないから』って言ってくれたんです）ヒソヒソ

舞（アイツらしいわね）ヒソヒソ

忍Ｐ「９６１や８７６から誘われたけど断ったんだよ」

愛「どうしてですか？」

忍Ｐ「７６５プロが好きだからさ。それに、まだ俺の役目は終わってないからな」

愛「そ、それじゃあ――――」

雪歩（もしかしたらプロデューサーは、私たちをトップにしたらどこかに行っちゃう気がするんです。でも！でも私――）ヒソヒソ

愛「――もし、その役目が終わったら――」

雪歩・愛「――私はプロデューサーとずっと一緒にいたいです！！／――よかったら８７６プロに来てくれませんか！！」

……完結へ続く

穴掘り娘と遊園地（後書き）

実際は予約掲載（予約は２０１１／１２月３１日２３：０８）
サーバーが混み合うと思ったので予約掲載で妥協

それから、この『雪歩誕生日記念』が終わると思ったか！？
完結に続くんだよ

『後編で終わるのはただの思い込み』ｂｙ作者

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9465y/

I.M.P.F ～The iDOLM@STER produce freedam～ Ｐとアイドルの不思議な日常

2012年1月1日01時50分発行